

営農情報

第24号 平成26年6月3日



「あまおう」6月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

平成25年度産の生産が終わりました。実績は以下のとおりです。

<JA 全農ふくれん実績>

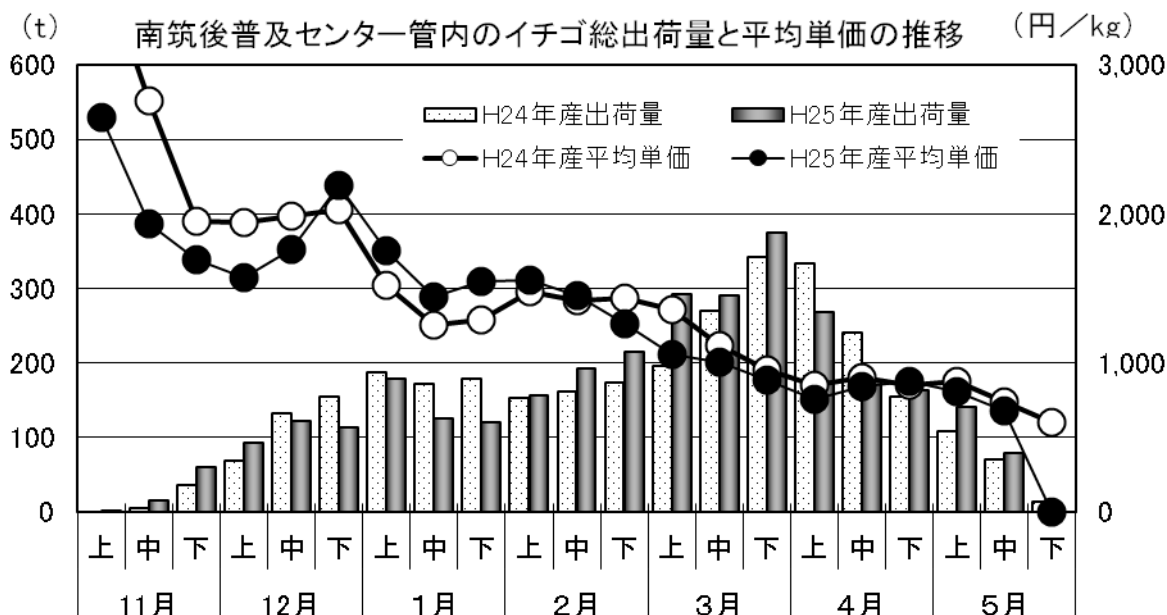
※()内は前年対比

	生産者数	栽培面積	10a 当たり数量	10a 当たり金額	平均単価
JA福岡大城	284 名 (100%)	66.7ha (99%)	4,197kg (102%)	5,032 千円 (99%)	1,199 円/kg (97%)
県合計	1,648 名 (100%)	341.3ha (101%)	3,456kg (100%)	4,148 千円 (97%)	1,200 円/kg (97%)

平成25年度産は、10a 当たり数量はほぼ前年並みの数量でしたが、平均単価が低かったため、10a 当たり金額も前年を下回る結果となりました。

25年産の主な特徴としては、①9月上旬の低温により、普通作型で平年より花芽分化が早くなったこと、②10月に入り、複数回台風が接近したことでビニル被覆が遅れ、特に早期型の頂果房において不受精の発生が見られたこと、③2月の曇天・低温及び2番果房までの果房間葉数が多かったこと、3月中旬以降の高温による3番果房が前進化となり、3月下旬から4月初旬にかけて2番・3番果房の収穫が集中し出荷ピークを迎えたことが挙げられます。

高収量を確保するためには、まずは苗作りが第一歩です。充実した苗を作ることが重要となりますので、作型に応じた計画的な苗作りに心がけましょう。



〈育苗目標〉

- ・ **クラウン径8mm以上の良苗作り**（収量確保）
- ・ **病害虫のない苗作り**（炭そ病、ハダニを本ほに持ち込まない）
- ・ **作型に合わせた苗作り**（まず、作型を決めましょう）

親株の管理

今年の親株は、3月の高温と定期的な降雨もあって、全体的には順調にランナーが発生していますが、一部、かん水不足等により子苗数の確保が遅れているほ場やアブラムシ類の発生が見られます。

子苗数の確保が遅れると梅雨に入ってから採苗することとなり、「炭そ病」に感染する危険性が非常に高くなります。降雨前・後の予防防除を基本に、罹病株の早期発見・除去など、「炭そ病」対策を徹底して下さい。

鉢上げ

【さしポット】 《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の株冷		
9月処理開始の夜冷	⇒	6月20日まで
普通ポット		

- 子苗採取前に、必ず、「炭そ病」の予防防除を行う。
- 本葉2～3枚で、3～5cm 発根した苗（それ以上伸びていれば切る）を用いる。
→本葉4枚以上の苗はうどんこ病、不時出蕾が発生しやすいので、苗が余るようであれば使用しない。
- ワラ被覆床では、採苗の1週間前からワラにかん水して子苗の発根を促進する。
- 活着を良くするため、鉢上げ前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはしない。
- 鉢上げ後7日程度は、黒寒冷紗(610番)等で遮光して乾燥を防止する。
- 活着するまでは、葉水程度のかん水を1日に数回行う。
- 「炭そ病」対策として、採苗は雨の日を避け、気温の低い早朝に行う。
- 曇雨天が続いた直後の晴天日の採苗、鉢上げは活着が悪いので注意する。
- 採苗後は苗が乾燥しないよう日陰に保管し、できる限り早く鉢上げする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないように湿らせた新聞紙に包み、2～3℃の予冷庫内で保存する。（保存期間は3日間まで）

※ 苗の発根促進・活着促進のために
タチガレン液剤 1, 000倍（挿し芽採取時 30分間挿し芽浸漬）

【 すけポット 】

鉢受け作業時期	⇒	5月末まで
切り離し目標時期	⇒	6月15～20日

- 根がこぶ状に発根した苗を、順に鉢受けし、海苔みず等で止める。
- 根が伸びすぎている苗は鉢上げに使用せず、全葉を除去する。また、ランナーが極端に細い子苗も使用しない。
- 降雨などで硬くなった培土は、根づき(根の入り)が悪いので、鉢土をほぐす。
- 鉢受け期間中は、「炭そ病」の定期的な防除を行う(特に鉢受け作業後)。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるので、乾燥している場合はかん水を行う。
- 徒長防止のため、子苗への施肥は行わない。
- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端を切除し、子苗の徒長防止と病虫害発生防止のため、親株の全葉摘除と直後の防除を行う。
- 子苗の切り離しは、最終鉢受け後10～15日目頃(根づいた頃)を目安に行う。ただし、降雨の日は絶対に行わない。

鉢上げ後の育苗管理

【 肥培管理 】

充実した苗作りに向けて、過不足のない肥培管理を行うが、「炭そ病」の危険性がある場合は、**窒素過多にならない**管理を徹底する。

- 活着したら、追肥(置き肥)を開始する(例:IB化成で1～2粒/ポット)
- 活着後、2回程度液肥を施用する(例:OKF1で1,500～2,000倍)。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。

【 かん水 】

- 「あまおう」は湿害に弱い。過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態(根の状態)を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は朝主体のかん水とし、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

【 葉かぎ 】

- 葉かぎ前は、「炭そ病」の防除を行う。
- 葉かぎは、活着後根が十分に回ってから開始する。
- 葉数3.5枚を確保するように、古葉の葉かぎを行う。
- 葉かぎは、1回につき2枚までにする。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に「炭そ病」の防除を行う。

【 病虫害防除 】

<炭そ病>

「炭そ病」は、病原菌が雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病する。

- 「炭そ病」は、濡れた状態が半日程度続くとイチゴに感染する。そのため、午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態にする。
- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ前後の防除に心がける。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- ポット間隔をできる限り広くとる(18cmの間隔は確保する)。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い(特に梅雨期)。
- すけポットでは子苗への感染を減らすため、できるだけ早く切り離す。

<うどんこ病>

うどんこ病は、病斑のある葉を入庫または定植しないことが重要である。

- うどんこ病の病状が進展する梅雨期を中心に、しっかりと薬剤防除を行う。
- うどんこ病に感染している苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで感染した葉が取り除かれてから、入庫または定植に使用する。
(入庫時や定植時に、病徴のある葉が除去できているようにする。)
- さしポットで鉢上げ後の寒冷紗は活着したら除去し、苗を太陽の光に充分当てる。

<疫病>

- 梅雨時期から発生が見え始めるので、定期的な防除に心がけてください。主な対策については「炭そ病」の項目を参照してください。

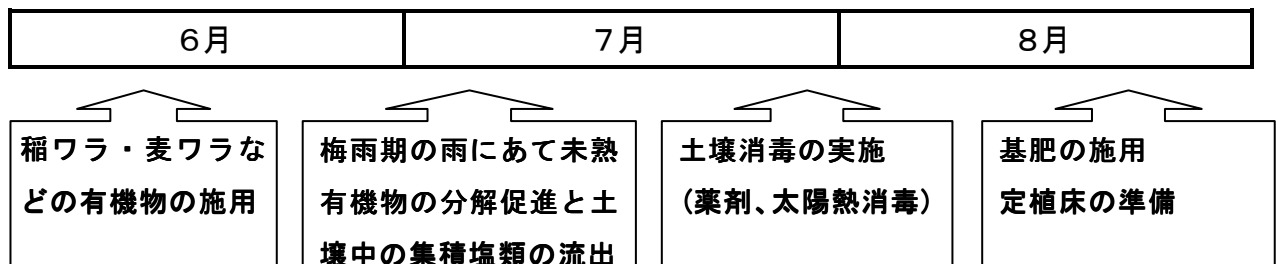
本田の土作り・土壌消毒

● 有機物の施用

- 前作の栽培で消耗された土壌有機物の補給が目的になる。(地力の回復)
- イチゴ栽培で消耗する土壌有機物は、堆肥約2t/10aに相当する。
- 稲ワラ・麦ワラ・家畜ふん堆肥等の有機物は、梅雨前に投入して土壌混和し、十分な雨にあてる。(分解促進、塩類溶脱のため)

● 土壌消毒

- 薬剤による消毒または太陽熱消毒のいずれかを実施する。



農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!